日本人の感性、日本語の特性
― 共感覚から考える ―

岩崎純一

2011年5月23日（月）

大妻女子大学文学部日本文学科
駒沢女子大学人文学部日本文化学科
合同勉強会
http://www.iwasaki-j.sakura.ne.jp/

漢字

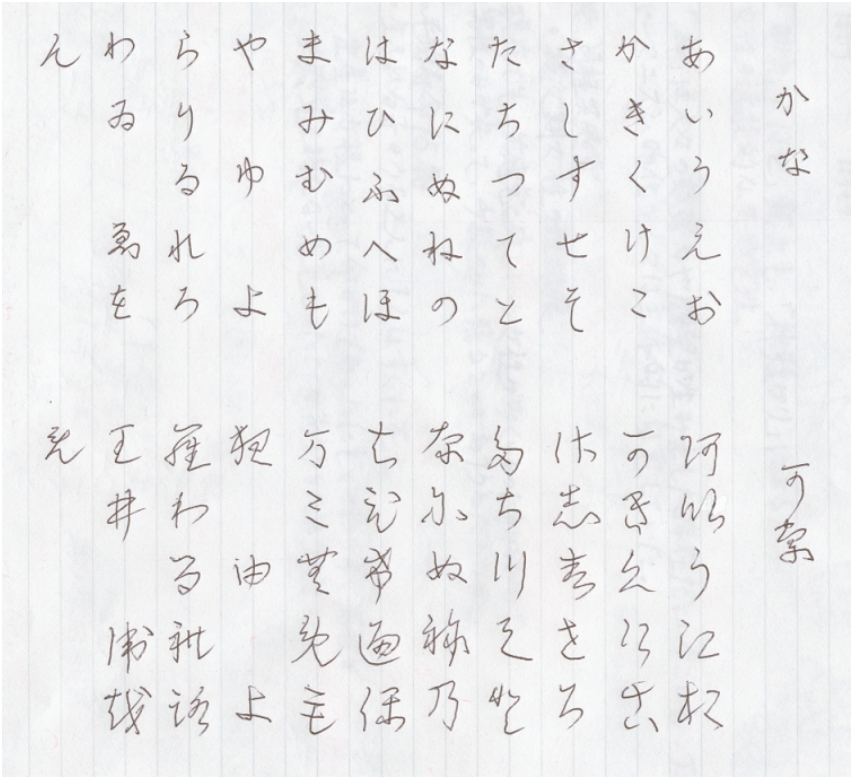
人 付 体 信 借 偽 優
寸 本 閥 言 昔 為 憂
門 閣 伐 闇 欠 欧 欲
各 音 区 谷

立 立 音 音 意
日 日 心 心
心 心

六月 水無月	五月 皐月	四月 卯月	三月 弥生	二月 如月	一月 睦月
芒種 夏至	立夏 小満	清明 穀雨	啓蟄 春分	立春 雨水	小寒 大寒
十二月 師走	十一月 霜月	十月 神無月	九月 長月	八月 葉月	七月 文月
大雪 冬至	立冬 小雪	寒露 霜降	白露 秋分	立秋 処暑	少暑 大暑

黒 灰 紫 青 紺 緑
黄 橙 茶 赤 桃 白

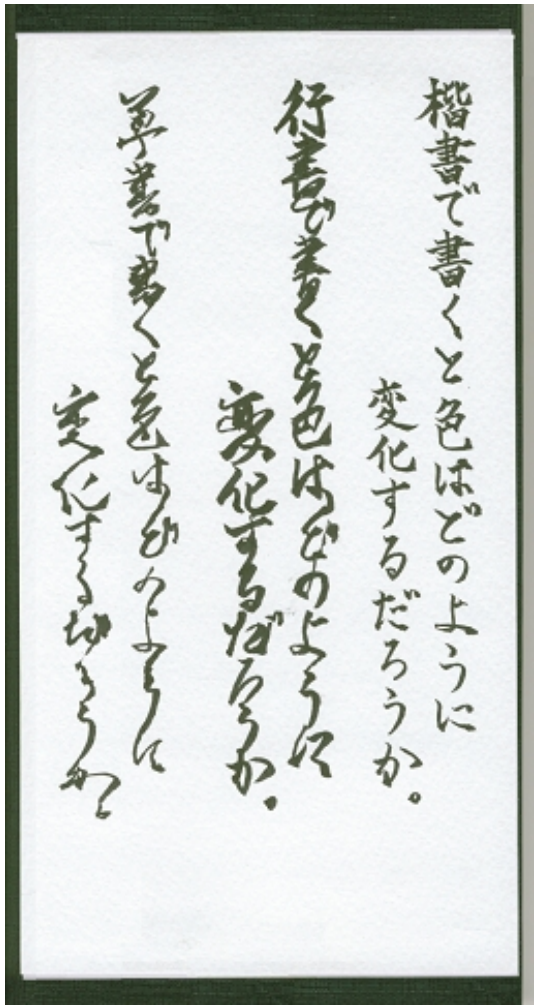
ひらがな・カタカナ

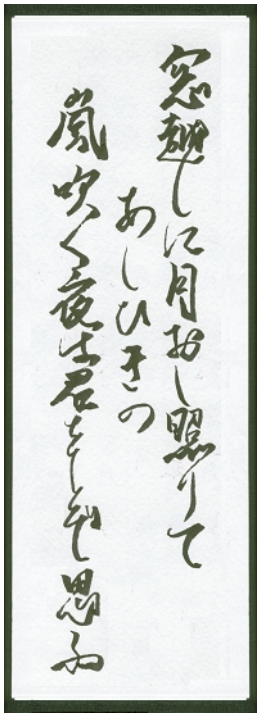


ん	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
	ゐ	り		み	ひ	に	ち	し	き	い
		る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
	ゑ	れ		め	へ	ね	て	せ	け	え
	を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お

ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
	ヰ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
	ヱ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

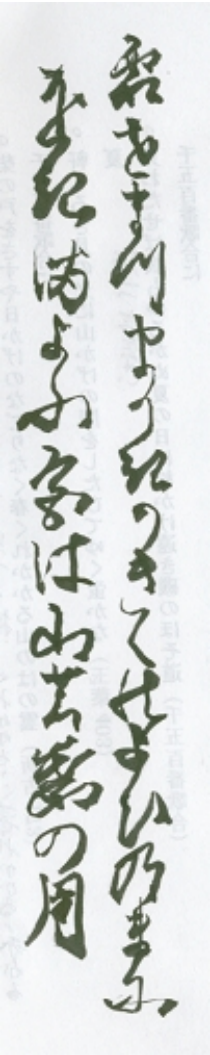
書

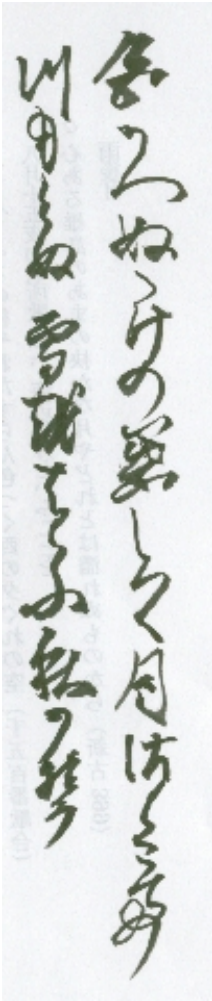

楷書で書くと色はどのように
変化するだろうか。
行書で書くと色はどのように
変化するだろうか。

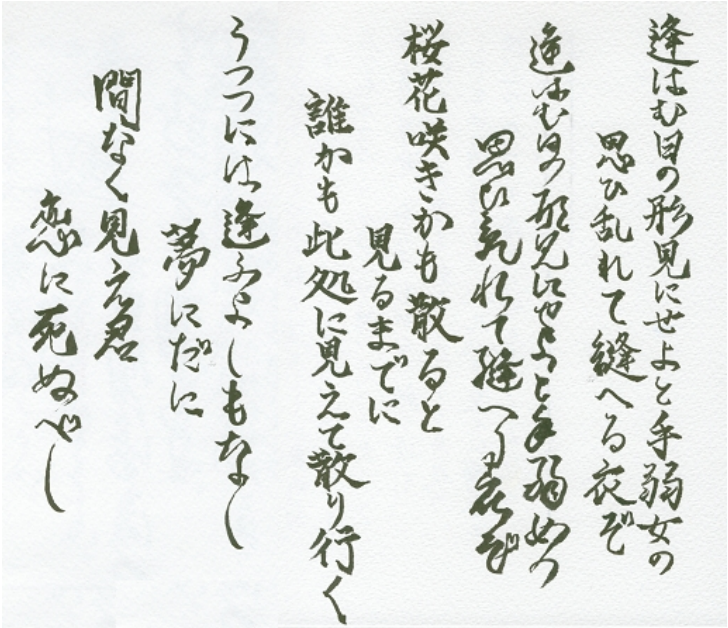

窓辺に月おし照りて
あしひきの
嵐吹く夜は君をしぞ思ふ

浮世の間を
照らしてぞゆく

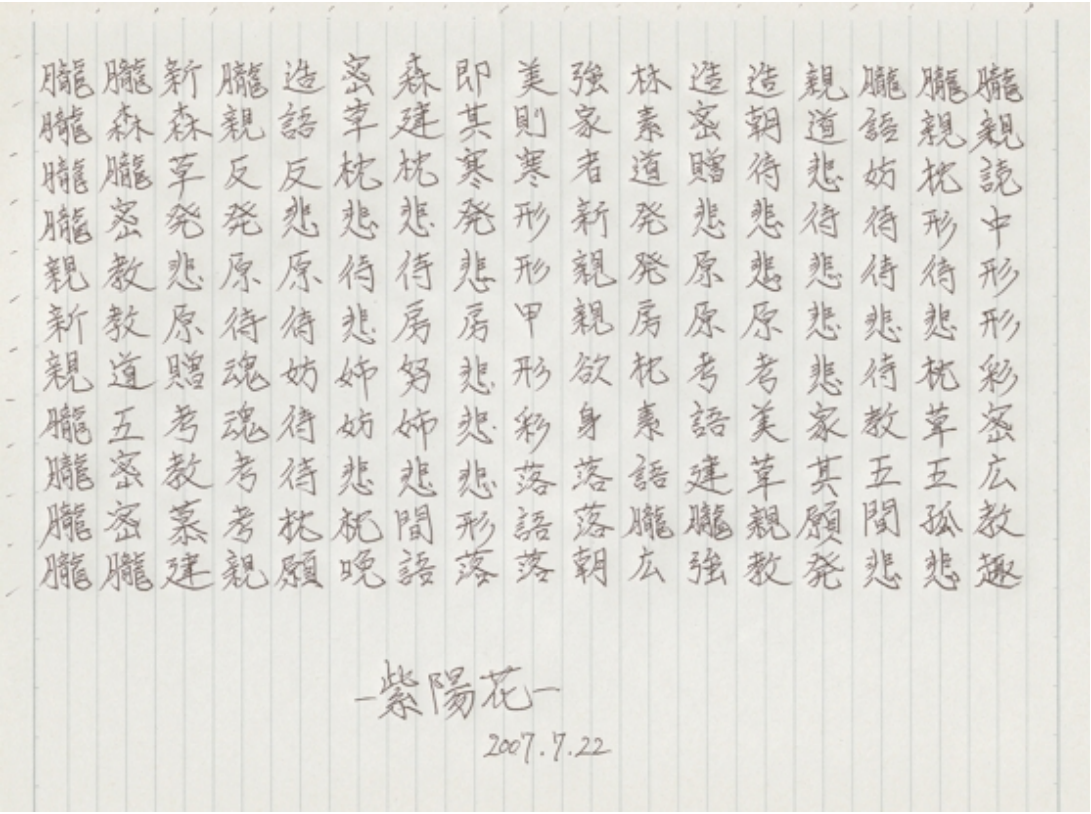
書






逢はむ日の形見にせよと手弱女の
思ひ乱れて縫へる衣ぞ
桜花咲きかも散ると
見るまでに
誰かも此処に見えて散り行く
うつつには逢ふよしもなし
夢にだに
間なく見えぬ君
恋に死ぬべし

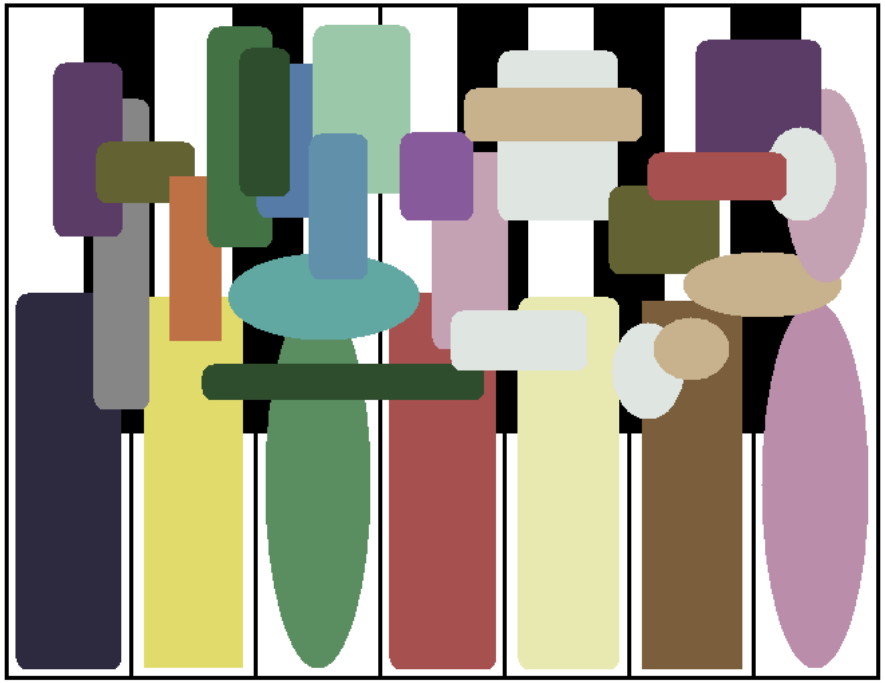
共感覚絵画


朧親語中形形彩密広教趣
朧親枕形待悲枕草五孤悲
朧語妨待待悲待教五閲悲
親道悲待悲悲悲家其願発
造朝待悲悲原考美草親教
造密贈悲原原考語建朧強
林素道発発房枕素語朧広
強家者新親親欲身落落朝
美則寒形形甲形彩落語落
即其寒発悲房悲悲悲形落
森建枕悲待房努姉悲間語
密草枕悲待悲姉妨悲枕晩
造語反悲原待妨待待枕願
朧親反発原待魂魂考考親
新森草発悲原贈考教慕建
朧森朧密教教道五密密朧
朧朧朧朧親新親朧朧朧朧
-紫陽花-
2007.7.22

アルファベット・数字・音階

ABCDEFGHIJKLMN
OPQRSTUVWXYZ
abcdefghijklmn
opqrstuvwxyz

1234567890



C C# D D# E F F# G G# A A# B

「共感覚」(Synaesthesia)ギリシャ語
=syn（共に）＋
aesthesis(aisthesis)（感覚）

◆19世紀一般人の共感覚の見方＝wild, lunaticなど否定的、恐怖・不安の対象

●「野蛮で狂気」

Francis Galton, Inquiries into Human Faculty and its Development (1883. London: Dent, 1911), 111.

●「精神遅滞者で、脳ミソが無茶苦茶」と同僚から言われた。

Cytowic, Richard E, The Man Who Tasted Shape (1993. Cambridge, Mass.: Bradford, 2003.) s, 34

●「共感覚をほめることは、人間の意識から牡蠣（カキ）の意識に戻ることを進歩と呼ぶようなもの」

Max Simon Nordau, Degeneration: Translated from the Second Edition of the German Work (Lincoln: University of Nebraska Press, 1993), 142.

◆共感覚者自身の見方＝自身の芸術に積極的に用いる
ロマン主義・象徴主義は「分断された五感への反省、共感覚の称揚」
ランボー「母音」“Voyelles”
ボードレール「照応」“Correspondances”

◆共感覚研究者の見方＝共感覚者に共感・肯定的

●「少なくとも乳児は皆共感覚者であり、脳の機能分化が無い」

Maurer, Daphne, and Maurer, Charles, The World of the Newborn , New York Basic Books, 1988

●「多くの人は大人になると共感覚を失うが、2000人に1人の割合で持ち続ける人がいる」

Marks, Lawrence E. 1975,"Synesthesia: The Lucky People with Mixed-up Senses." Psychology Today 9

●「乳幼児は五感の強弱だけを判断している。あるいは、少なくとも視覚と聴覚の区別は無い」

Max Simon Nordau, Degeneration: Translated from the Second Edition of the German Work (Lincoln: University of Nebraska Press, 1993), 142.

◆近代化以前の日本人・非西洋人の見方＝共感覚という言葉や概念がない時代から共感覚的に生きたり、それを芸術に用いている

●和歌における日本語の「色（いろ）」の語の使われ方を調査すると、現代日本語の「色」「音」「匂い」「味」「触感」が全て含まれる。

例：「色」「香り」が「身にしみる」（触覚）という記述

染む・沁む・浸む・凍む・滲む・入む・薫む・點む・視む・震む・枕む・・・

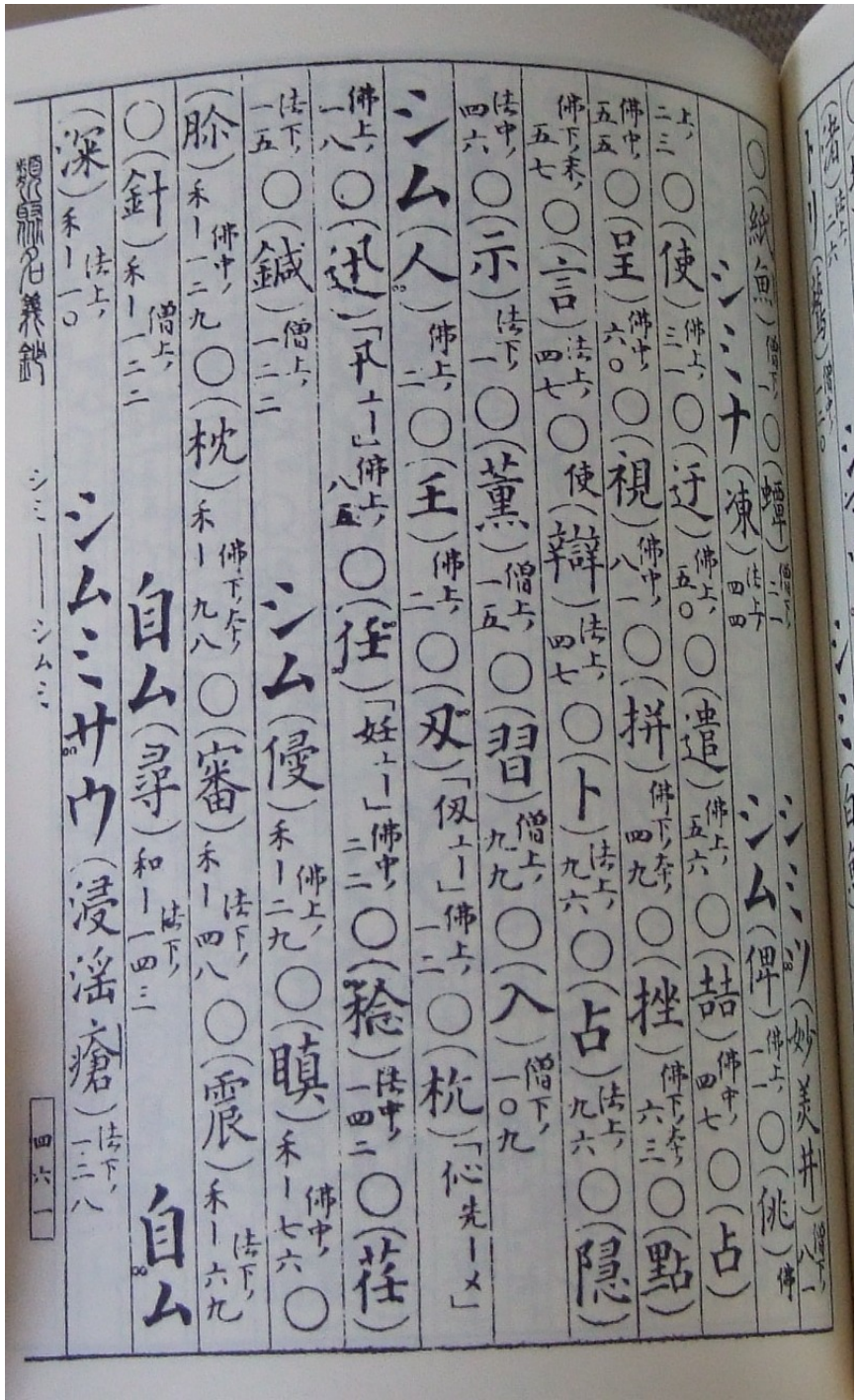
（『類聚名義抄』『色葉字類抄』など）

白妙の袖の別れに露落ちて**身にしむ色**の秋風ぞ吹く（藤原定家）
秋吹くはいかなる**色**の風なれば**身にしむ**ばかりあはれなるらむ（和泉式部）
更け行けばかすめる**空も身にしみて**いかにひさしき月となるらん（藤原基家）
いかがふく**身にしむ色**のかはるかなたのむる暮の松風の声（八条院高倉）
よそにだに**身にしむ**暮の鹿の**香**をいかなるつまかつれなかるらん（俊恵）
風の**音身にしむ色**はかはらねど月にいく度秋を待つらむ（順徳院）

風に**しむ**露の我が**身**は秋の**色**吹き返す袖のよその移り香（岩崎純一）
ひとり聞く秋の梢に時過ぎて残る我が**身にしむ**風の**色**（岩崎純一）

「音色」「色香」「色気」などの言葉

『類聚名義抄』



○（紙魚）僧下、二一　○（蟫）僧下、二一

シミナ（凍）法上、四四

○（使）佛上、二一　○（迂）佛上、五〇　○（遣）佛上、五六　○（喆）佛中、四七　○（占）上、二三

○（呈）佛中、六〇　○（視）佛中、八一　○（拼）佛下、本、四九　○（挫）佛下、本、六三　○（點）佛中、五五

○（示）法下、一〇　○（薫）僧上、一五　○（習）僧上、九九　○（入）僧下、一〇九　○（言）法上、四七　○（使）法上、四七　○（辯）法上、四七　○（卜）法上、九六　○（占）法上、九六　○（隱）法中、四六

シム（人）佛上、二〇　○（壬）佛上、二〇　○（刄）「仭ナリ」佛上、一二　○（枕）「心先ノメ」佛上、一八

○（迅）「孔ナリ」佛上、八五　○（任）「妊ナリ」佛中、二二　○（稔）法中、一四二　○（荏）法下、一五

○（鍼）僧上、一二二

シム（侵）禾ー佛上、二九　○（瞋）禾ー佛中、七六　○（胎）禾ー佛中、一二九　○（枕）禾ー佛下、本、九八　○（審）禾ー法下、四八　○（震）禾ー法下、六九

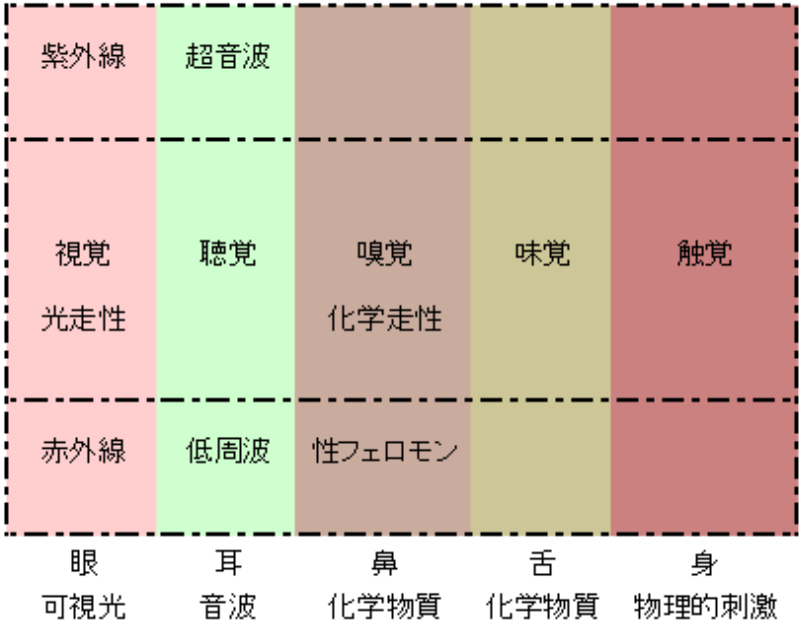
○（針）禾ー僧上、一二二

自ム（尋）和ー法下、一四三

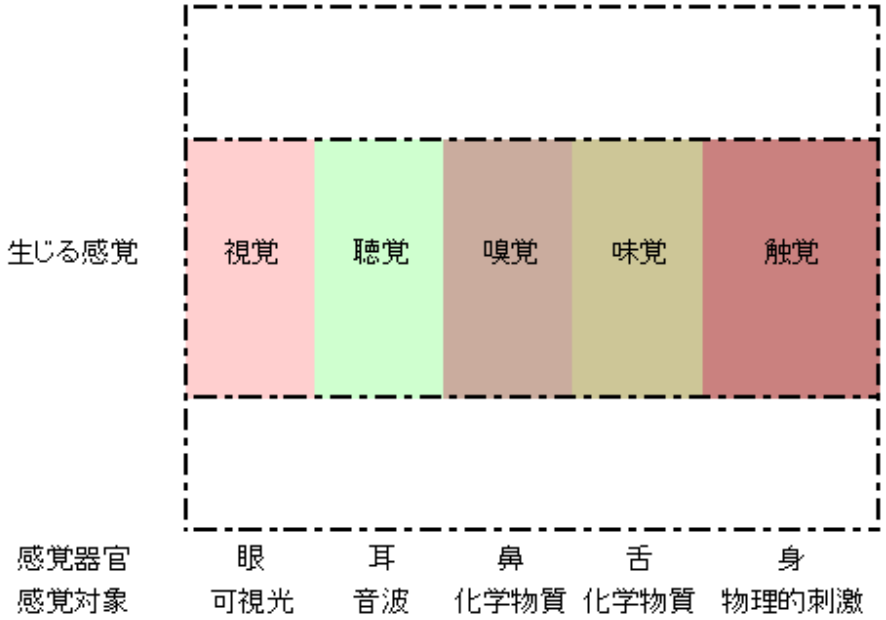
シムミサウ（深）禾ー法上、一〇

自ム（浸淫瘡）法下、一三八

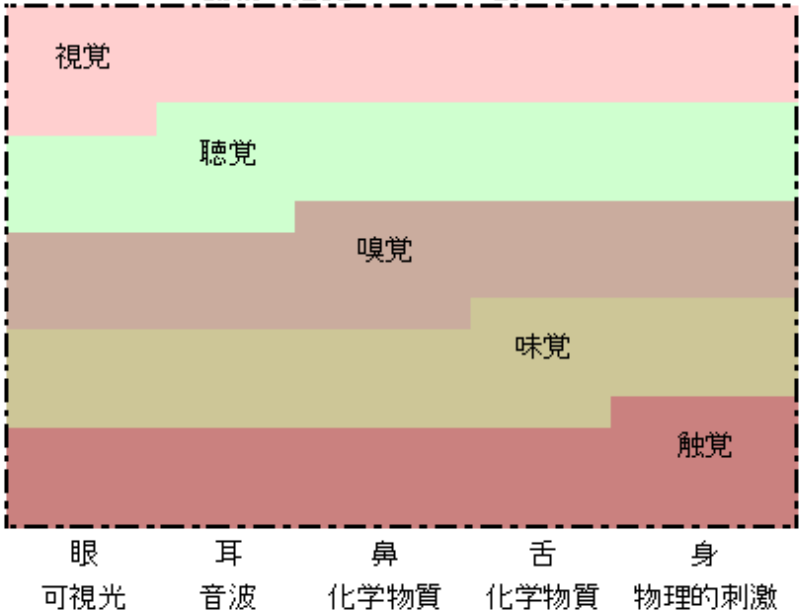
動物の感覚についての科学の解釈



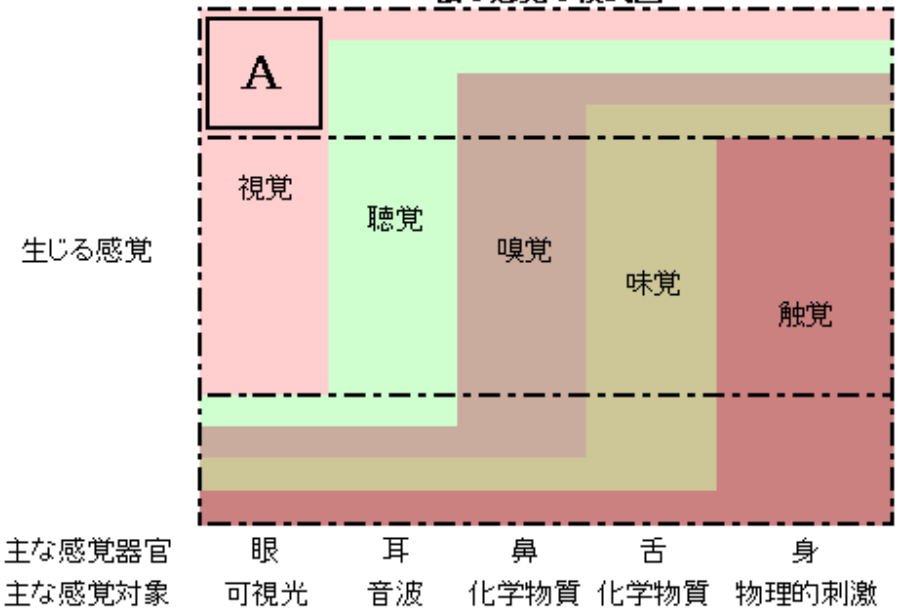
非共感覚者の感覚の模式図



動物の感覚についての私の考え

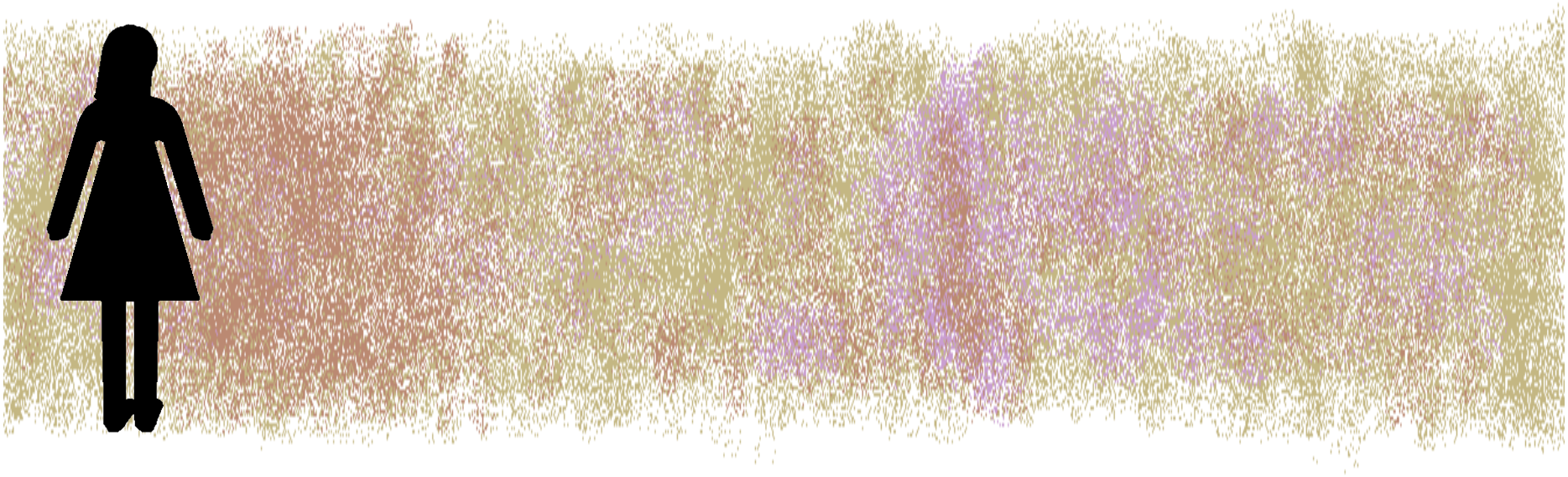


私の感覚の模式図



五感の対象	やまとことば	近現代語（明治以降）
●色・光・形 ▲音 ■匂い・香り ★味 ◆形・重さ・軽さ・硬さ・柔らかさ	●見る・見える・見つめる・眺める・望む・覗く・うかがう・にらむ・目にする ▲聞く・聞こえる・つんざく・耳にする ■匂う・香る・嗅ぐ・くゆる ★味わう・食べる・食う（甘い・辛い） ◆触る・触れる・当たる・掠る・擦れる・付く・しみる・凝る・かじかむ・しびれる	●観察・凝視・目撃 ▲伝聞・傾聴・傍聴 ■芳香・腐臭・薫染 ★賞味・吟味 ◆接触・付着・密着 ●目する ◆接する ◆感じる ◆感ずる

やまとことば （ほぼ訓読みのこと）	現代語 （ほぼ音読みのこと）
「色が身にしみる」	「色彩が身体に浸透する」
「音を見る」	「音波を目撃する」
「音色を味わう」	「音波の色彩を賞味する」
「香りを聞く」（香道）	「香気を聞知する」
「柔らかい音」	「柔軟な音波」
「重々しい色」	「重厚な可視光線」
＝幼児期・古代日本・先住民社会では共感覚が生活になじんでいた（いる）のではないか	“hear color(s)” “see sound(s)” ＝wild（野蛮）、lunatic（狂気）と言われた要因



→t　|→　月経　→|　　排卵↑

身体＝文字（記号）どころではない究極の形状
（文字を色で読むように、身体を色で読む。）
→共感覚が「障害」でないことを示す突破口。
→幼児・太古の人間にはごく普通にあった感覚である可能性。
→共感覚遺伝子がX染色体上にあるとの説を問い直す突破口。（Y染色体）
→共感覚者には女性が多いのは、現代だけである可能性。

私の立場
乳幼児・太古人類総共感覚者説（西洋先進文明圏で早くから失われていく）
共感覚能力の根源は、「種の保存能力」（医学・神経科学が補填）

共感覚の種類

文字に色が見える＝色字
音に色が見える＝色聴（絶対音感者が多く持つ共感覚として知られる）
風景に音が聞こえる＝音視（色聴よりはまれ）
味に色が見える
匂いに色が見える
味に形がある
匂いに形がある
人や物を見ただけで触れることができる＝ミラータッチ共感覚
触感に色がある

●生活に役立つ共感覚
★女性に色が見える（排卵期・月経期・間期などを当てる、月経不順が見える、子宮頸癌や乳癌の発見）＝対女性共感覚（私の造語、著書でも使用）
★分化された各五感では存在を確認できないものが共感覚で確認できる
不可視光線の存在が「聞こえる」ことで分かる。
超音波の存在が「見える」ことで分かる。